

平成21年度 新たな農林水産政策を推進する実用技術開発事業 研究終了時評価結果一覧(3課題)

課題番号	課題名	研究グループ (※は中核機関)	研究総括者 (所属は中核機関)	研究期間 (実施年度)	研究概要	評価所見	総合評価
2048	施設土壌病害の早期再発防止技術の開発	(独) 農業・食品産業技術総合研究機構(九州沖縄農業研究センター)(※) 香川県農業試験場 (株) アグリテクノ矢崎	西村 範夫	2年間 (H20～ H21)	注入精度の高いポンプを搭載し、接地輪駆動をモーター駆動にした試作土壌消毒機が3月頃に完成する。サラダナ根腐病罹病根を用いた消毒試験で注入精度を調査し、問題点を改善する。また、モーター駆動にしてもハウス両端部での消毒効果が低ければ、乗用管理機の足回りを改善し、実用性評価を行う。カーネーション萎凋病では、罹病根消毒に必要な燻蒸剤の最少注入量を確定し、堆肥とナタネ粕を利用した生物防除法の発病遅延効果を明らかにし、本病発生ハウスで防除実証試験を行う。最終的に、メロン等の罹病根消毒に必要な最少注入量のデータを加え、消毒機の注入量可変範囲を定めて土壌消毒機を完成させる。	サラダ菜根腐れ病とカーネーション萎凋病のメチルイソチオシアネート・D-D油剤による防除技術において、土壌消毒技術・消毒機の改良及び生物防除技術の併用という研究方法は適切であり、2年間の短期間で、カーネーション萎凋病については、目標に近い成果を達成している。カーネーション萎凋病の再発遅延技術は現場への普及性が高く、消毒機の吐出精度管理の重要性とその向上は重要な成果である。ただし、今回完成させた土壌消毒機については、今後より多くの現地で実証試験を展開し、その防除効果の安定性や技術的な適応性を確認して行く必要がある。	B
21102	我が国養蜂群の健全性の現状調査と健康状態に影響する要因の解析	(独) 農業・食品産業技術総合研究機構(畜産草地研究所)(※) (国) 名古屋大学大学院生命農学研究	木村 澄	1年間 (H21)	ミツバチ群の消長を定期的に調査し、併せて働き蜂・花粉などのサンプリングを行う。農業・疫学的解析と消長データを比較し、原因究明に繋がるクリティカルなポイントを抽出する。また、管理状態が異なる蜂群で、状態を表す指標(ストレス関連遺伝子の発現、女王の産卵性など)等を調査する。	わが国の養蜂業、果樹・果菜生産業にとってミツバチ不足のもたらす経済的影響は大きく、ミツバチの安定的な供給と健康維持は重要課題である。本研究は、短期間にミツバチ群の消長、ミツバチの健康状態を左右する要因、ミツバチに対するノゼマ病感染の影響など、基礎データを蓄積し、今後のミツバチの安定供給に役立てようというもので、明確な目的を持っており、かつおおよそその目標を達成した点で優れている。蜂群崩壊は、日本だけで起こっているのではなく欧米でも大きな問題になっていることから、欧米と同じ原因では蜂群崩壊が起こっているのか調査するとともに、わが国の蜂群崩壊が海外からの蜂群に影響されているのかも明らかにする必要がある。	B
21103	プラムポックスウイルスの防除法及び検疫措置の早期確立のための調査研究	(独) 農業・食品産業技術総合研究機構(果樹研究所)(※) (国) 東京大学大学院農学生命科学研究科法政大学生命科学部 (財) 東京都農林水産振興財団東京都農林総合研究センター	中野 正明	1年間 (H21)	PPVの適切な防除と検疫措置の検討を行うためには、本ウイルスの感染範囲及び伝染方法を速やかに特定し早期に的確な防除を行う必要がある。また、PPVに感染した果樹の病徴や被害の実態も速やかに把握しなければならない。このため、感染時期及び拡散経路の推定、有効な薬剤防除技術の調査、主要果樹や周辺雑草への感染性、果実の被害実態の調査、安価で確実な検定が可能となる診断技術の開発等を行う。	目標に見合った成果が出ている。緊急対応についてはほぼ達成されているため、今後は、植物検疫上必要な研究課題と、ウイルス学的な検討課題とをどのように分別し、かつ、連携させていくのか、方向性を定めて進めていくことが必要になろう。	B

注: 総合評価は、A(目標を上回った)、B(目標どおり)、C(目標の一部は達成)、D(目標の達成は不十分)の4段階評価による。